

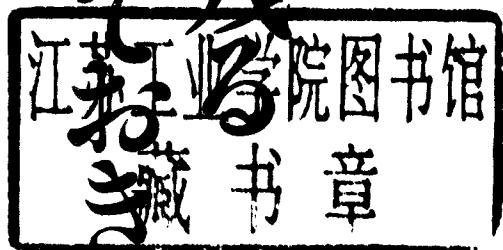
心に残る とっておきの話

普及版第五集

潮文社編集部編



心に残
とつて



の話

普及版第五集

潮文社編集部編

心に残るとっておきの話 第五集〈普及版〉

平成 14 年 5 月 20 日発行

編 者 潮 文 社 編 集 部

発行者 小 島 米 雄

発行所 株式会社 潮 文 社

〒 162-0843 東京都新宿区市谷田町 2-31

電話 03-3267-7181 (代)

振替・00140-7-69107

組 版 株式会社 フカサワ

印 刷 有限会社 埼京印刷

製 本 株式会社 越後堂製本

© CHOBUNSHA 2002 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-8063-1354-8

人間の再発見

新装普及版の発行にあたって

人生はドラマだといわれる。

しかし私達は、日々、その機微きびに触れながら芳潤ほうじゆんな高級ワインの味と香りを、安価な合成酒なみに飲みくだしてしまつてはいないだろうか。

『心に残るとっておきの話』が、多くの読者の感動を呼んできたのは、市井しせいの実人生じつじんせいの中に、世の名作を凌しのぐ真実がちりばめられているからに違いない。

「人間万歳ばんざいと叫びたくなるような一冊です」「何気なにげない巡り合わせを、流砂りやうさのように流してしまふか、玉として残すかは、その人の感性かんせいを表わすものでしょうか」

「絶句ぜっく——目のウロコが数十枚落ちる音がしました」「心底をゆさぶる強い衝撃しやうげき、かつて味わったことのない感動は、魂たましいの根源こんげんを問うに充分であり、感謝せずにはいられない」

「真実の言葉がこんなに胸を打つものかと、思わず本に有難ありがとうと言つてしまいました」

「どの編も人の真実の心を観かんずることができる。正ただに現代の経典きやうてんというべきものかと思

います」「65年生きて、これ程ぎりぎりの線で感動、感銘かんめいを受けた事があるだろうか。何かこれからでも出来る様な気がします」「この本は本当に素晴すばらしい。山にたとえれば、本の富士山です」「この本を読んでいると優しくなれる。失いかけていた自分の原点に戻る。そんな本です」「ひたひたと押し寄せる感激に胸が一杯です。仰あおぎ見る人生讃歌さんかの金字塔きんじとうです」等々々——

全国から寄せられた、こうした読者の声にも心打たれるものが多かった。

もつと読みやすく、もつと安く——という読者の方々の要望ようぼうにお応こたえし、文字も大きく、ふりがなも多くして、ここに新装普及版を出すことにしました。一冊あたりの収録しゅうりく篇数は減りましたが、順次発行の予定です。少しでも多くの方々に読んでいただけると幸いです。

潮文社編集部

(なお、筆者の職業等は旧版当時の記載のままになっています)

既成きせいの価値観かちかんを超こえて

禪ぜんに担板漢たんばんかんという言葉がある。板いたを担かついだ男という意味である。肩に板を担ぐと、その片側は見えなくなる。この短い言葉に込められているのは、人はそれぞれの教育や環境かんきよう、職業や経験などによって固められた常識とか、ものの考え方という名の板を担いでいるという痛烈つうれつな警告けいこくである。

信念とか信条といえは立派に聞こえるが、これがなかなかの曲者くせもので、一歩間違うと、孤高ここう、独善どくぜんの世界に自らを閉じ込め、広い世間をわざわざ狭せまくしていることが少なくない。

常識といわれるものにも問題がある。その中にどっぷりとつかり、安住している者には発見もなければ感動も進歩もない。醉生夢死すいせいむしの人生を望む人はいないはずだ。禪はそう言って、人々の人間としての覚醒かくせいを促うながしているのではないか。

『心に残るとっておきの話』が多くの読者から熱いエールを送られてきたのは、生き

た人間を忘れた頑固^{がんこ}な信念や澱^{よと}んだ常識の戸板^{といた}をはずし、新鮮な空気と、その向こうに広がる豊かな可能性を呼び醒^さましてくれるからに違いない。

平成八年五月

潮文社編集部

(この普及版第五集には四〇篇を収録、残り二〇篇はいずれ後篇に入れる予定です。)

(平成十四年四月)

心に残るとっておきの話 普及版第五集／目次

人間の再発見

既成の価値観を超えて

潮文社編集部

お乳

大野 喜三

筆耕業

九

こいし文

鳥越 隆一

元会社役員

一二

トマトさん

松本美千代

主婦

二二

四つ葉のクローバー

坂本由美子

主婦

二九

手作りの教科書

出口 喜夫

会社員

三三

サッチャン

根本 正一

元警察官

四一

犬猫の仲

坂口 清子

会社員

五〇

貴子のためのコンサート

鈴木 律子

主婦

五七

母の思い出

石川智重子 主婦

六五

香港にて

酒井 明子 家裁調停委員

七一

小僧の大晦日

長谷川米造 元工場勤務

七五

夜叉の清次

野中 博 会社員

八〇

病院の待合室で

山本 博美 病院事務職員

八九

万年筆

岩佐 侑子 主婦

九二

桂川で

武田 緑 高校教諭

一〇〇

父の遺産

須藤 敬 中学・高校教諭

一〇五

そのまま受け止めて

黒田 峰子 主婦

一一〇

私の神様

浅野 和彦 会社員

一一五

飲食店にて

浦田 茂 元警察官

一二二

会社に縛られる

別府喜美雄 郵便局勤務

一二五

天使のイボ

孝岡眞理子 主婦

一三〇

勇氣ある医者	伊藤 通弘	無職	一三五
赤とんぼの唄	長谷川玉江	主婦	一四〇
文明の偏見	藤田紘一郎	大学教授	一四六
死の淵の声援	吉田 民子	パート勤務	一五四
胎児の記憶	益永 真弓	主婦	一五九
片方の松葉杖	久野 賢二	無職	一六七
ある老女の遺書	河橋 敏江	食料品店経営	一七七
癌	関屋 宏行	貸倉庫業経営	一八〇
炭鉱の町にて	針谷 幸江	無職	一九〇
兄の霊	中村 弘	元高校教諭	二〇〇
葛飾のひと	小久保節子	無職	二〇五
鳶職の父	田財 武男	コンビニエンスストア経営	二一四
あのひとこと	余吾 知子	高校生	二二一

巢鴨にて

藤木二三男

広告・PRコンサルタント 二二七

カンニング始末記

樋口 大成

工業高専名誉教授 二三三

お約束ごと

上仲まさみ

主婦 二四二

神意

藤田 文子

ボランティア団体代表 二四九

命のトンネルを抜けて

佐藤 啓蔵

無職 二五七

大人の国

陰地 茂一

会社役員 二六四

お乳ちち

大野 喜三きぞう

昭和三年生（京都市）
筆耕業

「あっ……なにか目に入った。痛い、目の中がころころする、涙が出る。涙が止まらない、困ったなあ」

終戦のあくる年、昭和二十一年六月頃のことであつた。当時十七歳の私は知人を頼つて、京都から鳥取へ食料の買い出しに出かけた。

急行などなかった。鳥取までは山陰線さんいんせんに乗り、京都から八時間以上かかるのだが、何時間かかっても、とにかく目的地に着けばまだ良かった時代である。

朝早くから長時間改札口に並び、やっとの思いで座席に着けた。すぐに満員となり、大きな荷物を持って立っている人が通路に溢あふれた。私の前の席にはおばあさんと、乳飲ちくの

み子を抱えた若い母親が安堵した表情で座っていた。時間が経つにつれ、乳児がむずかる。その時々、若い、きれいな母親が、人前でひかえめにお乳を出される仕種に、思春期の私はいつも目をそらしていた。

当時は冷房など考えられぬ時代であるから、むし暑い車内の窓は開けっぱなしだった。山陰線はトンネルが多い。トンネルに入ると窓から汽車の煤煙が入ってくる。

窓側に座る母親のふくよかなお乳にしゃぶりつく乳児が気になってしまい、見ない振りをして目をやったとたん、煤煙が私の目に入ったのであった。

ハンカチの端をそっと目に入れたり、つばをしませて、入ったゴミをとろうと再三試みるがとれない。

そんな様子を見ていた前のおばあさんが、お乳を与えている若い母親に、二言、三言、話している。

するとその母親は、「えっ」と、はにかんで躊躇していたが、私の顔を見て納得されたのか、「うん」とうなずいた。

「煤煙が入ったんだ。貴方の目に、この娘のお乳を入れたら、とれるかもしれん。昔

からそうすると、よくとれたんだ」と、おばあさんが話しかけてこられた。

私は恥ずかしさに一瞬、「いや、結構です」と強く断った。けれどもおばあさんは、体を乗り出し、「そんな遠慮せんでも、しゅ、しゅと、かけるだけや。さあ、さあ」と、促す。

私は、「はあ」と、半信半疑、蚊の鳴くほどの声で答えた。

若い母親は、乳児をおばあさんに預けて、そっと私の目の前に、白い、大きな、美しいお乳を出した。私は一瞬、「ウアー」と、声なき声をあげた。

「絞るので、そっちの目を大きく開けて」と、彼女が言う。両手で目を開けて、母の乳を飲むかのように、はにかみながら近づくと、ほんのりした母の、異性のぬくもりを感じた。

しゅ、しゅ、と、四、五回位、乳を絞ってもらった。目をパチ、パチまばたかせると、ゴミがとれたのか、目が自然に開く。痛くない。

「あれっ、とれた」

まつ毛の外側に煤煙がくつついていた。

「ほれ」

その女は、乳児に使うガーゼで、ゴミをとってくれた。恥ずかしかったが、嬉しかった。涙が自然に出てきた。どんな喜びのお礼を言ったか覚えてはいない。

おばあさんは、「よかった、よかった、よくしてくれた」と、その女に話しながら笑っていた。それはまるで母と娘の会話であった。

近くでジッと見ていた周囲の人達の沈黙が笑い声に変わった。皆、満足気であった。お年寄りに教えられた実生活の処方箋にびっくりするとともに、他人ばかりの中で心のぬくもりにふれ、その中に母を見たこの旅は、私にとって忘れることのできない思い出である。

こいし文

鳥越 隆一
とりごえ たかかず

大正一四年生（福岡県）
元会社役員

長女かず子には娘が三人いる。どの子も、三歳になる少し前から、独りでも、わが家に泊まるようになった。

一人が二人になり、三人が一緒に泊まるようになって三年がたち、また二人に戻った。それから三年後、定期的に泊まるのは、未っ子希依だけになった。

妻のわか子は、「孫の祖父母離れ。わたしからの巣立ち。少し惜しいですけどね」と言った。

それ以来、希依はお祖母ちゃんを独占した。好きなテレビチャンネルも、だれに気がねすることなく自由に選べた。

月に二回、土曜には必ず泊まり、時には月曜の朝、わたしが車で学校に送ることもあった。

「そんなに泊まると、お祖母ちゃん疲れるわ。病気にでもなったら、どうするの」と、姉たちや母親に言われ、

「お姉ちゃんたちに比べて、希依はまだ半分しか、お祖母ちゃんと寝ていない」と、反論した。が、多勢に無勢、月に一泊ということにされてしまった。

しかし、十日もたつとがまんできなくなり、とうとう母親のかず子にねだりにねだつて、ハンドルを握にぎらせた。

わたしは五年前、狭きょうしんしう心症を患わづい、紹介されて、東京の大学病院に約一月半、入院した。その後、三年間、通院で治療を受けた。

千葉ちばの自宅から大学病院は遠かった。それに救急車も県外には運ばぬことを知った。わたしに、万一、夜中に発作ほっさが起き、間に合わなくても、本人は分からずじまいだから、それでもいい。しかし、かず子夫婦が大急ぎで駆けつけるまでの二、三十分の間、独ひとり、肝きもをつぶし、ただもう、おろおろするばかりの妻を思うと、ふびんでならず、専門は違つても、脳外科医のうげかいである息子のそばに住むのが一番いいと考え、移転を決意した。

我々の福岡転居を、かず子が娘たちに話しているかどうかを確かめないまま、一月ばかり前から、移転の下準備をはじめた。

希依の土曜泊まりは当然のこと、続いていた。来た日は気づかなかつたようだった